

二〇一六年五月六日

風の意に従ひ芽吹く柳かな
里山の起伏野を染む芝桜
夕風や泳ぎ疲れし鯉のぼり
小つむじに高舞ひ落花田に道に
卯浪立つ沖よりとどく汽笛かな
薫風に手足伸ばして体操す
濠の水染むるばかりに落椿

ともえ
三 刀
とろうち
泰 山
智恵子
満 天
泰 山

二〇一六年五月五日

山吹や岩にしぶきて谷の水
雨晴れていよよ眩しき山若葉
序破急の潮騒のごと青嵐

とろうち
せいじ
よう子

二〇一六年五月四日

釣り人の寛ぐ背なに若葉風
自家製の苺頬ばる至福かな
丘の上や眼下の海に卯浪たつ
桐の花雨が洗ひし空ま青
切つ先をそつと押しやり菖蒲の湯

智恵子
明日香
たか子
なつき
たか子

二〇一六年五月三日

夏の蝶急磴のぼりつめんとす
万緑を抽んでてをる丹の鳥居
卯波寄すテトラポットを鳴かせもし

さつき
とろうち
宏 虎

頂きし新筍の産毛撫づ

なおこ

十哲の墓石を数ふ青葉影
慈悲塔のしとねのごとく花すみれ
群鳩を翔たせし空は聖五月

なつき
ぼんこ
菜 々

二〇一六年五月二日

風よ吹け園児の仰ぐ鯉のぼり
外濠に沿ひてジヨギング風薫る
直立の托鉢僧に風薫る

ぼんこ
ひかり
こすもす

二〇一六年五月一日

お静かにてふ貼り紙や燕の巢
吟行子道後の旅の春惜しむ
わたしには格闘技なり布団干す
草刈機唸りそめたる日曜日

たか子
明日香
よし女
さつき

二〇一六年四月三〇日

かわらけの放物線や谷若葉
マネキンは裸にされて四月尽
若葉風色ある様な無いような
青嵐帽子おさへて笑ひあふ

よう子
満 天
宏 虎
なおこ

毎日句会みのる選・二〇一六年五月八日